

40周年記念寄稿

- 生田 房弘「上信越神経病理懇談会第1回の頃、日本で「神経病理学」と呼ばれていたもの」 p. 24
- 中里 洋一「第40回上信越神経病理懇談会を祝して」 p. 25
- 池田 修一「上信越神経病理懇談会40周年に思うこと：信州大学医学部も何とかお仲間を継続できそうです」 p. 26

上信越神経病理懇談会 40 周年記念

記念寄稿

上信越神経病理懇談会第1回の頃、日本で「神経病理学」と呼ばれていたもの

新潟大学 名誉教授 生田 房 弘

この「懇談会」を何故40年前に開こうとしたのかをご理解いただくには、40年前の「日本の神経病理学」の状況を知っていただくことが不可欠のように思われます。

1900年代前半は、世界的に精神科や解剖学のごく少数の方々が、「鍍銀染色法」を中心に、ゴルジ法とかビルチョースキー法とか、所謂特殊染色法で脳は染められておりました。この方法は神経細胞やある特定のグリア細胞だけを染め、その細胞の正常な形態を知るには極めて鮮明で見事でありました。しかし他種の細胞も血管も染まらないため、他の細胞や組織との“関係”を見ることができない。「病理学」には不適切、という他ない方法でした。しかもそれらの染色法は、数日から数週間を要し、見事に染まると実に美しい形態を示しますが、その結果は極めて気まぐれという他ないのが常でありました。

しかし、この特殊染色を楽しんでおられた諸先生からは、「脳は特殊染色で見なければ“プロ”ではない。」という風潮が世界的に定着していました。

この為、毎日幾例もの剖検例を診断しなければならない病理学教室では、そんな時間がある筈もなく、全国の病理学教室の教授は、その特殊染色法の煩雑さ故に、脳そのものの観察を敬遠するようになり、「うちの大学も脳に弱いので・・・」と、平然と公言し合える環境にありました。

私が、A. アインシュタイン大学の、H. M. ジンマーマン先生から、HE染色を入口とする「神経病理学」を学んで帰国した1964年には、既に日本の神経病理学会もその第5回総会が終わっていました。

しかし、この学会の重鎮である諸先生方は、いずれも、「ワクチン接種後脳炎」とか、「あるグリアの特殊染色法」とか、「細胞培養法」など、すべて特定の疾患や、特殊な技術に優れた功績は積み重ねられていても、脳という臓器に生ずる様々な、脳梗塞や変性疾患など、全体を見通し、相互に考え較べ、脳腫瘍や奇形も、脳の他疾患や発生学などと不可分のものであるという様な見方、考え方の「神経病理学」とは、遙かに離れた学会に私には思われました。

しかも、この厚い壁を全国的に変えようなどと考えることは、絶望的にさえ思われた苦闘の10年間でもありました。そこでせめてローカルに、火の手を挙げることが出来ないか思案していました。

たまたま、群馬大学「病理学教室」の石田陽一先生も、発癌物質による実験的“脳”腫瘍の形成に成功されました。そこで、その“脳”を手がかりに、石

田先生に「一緒に脳の病理学をやしましょう。症例を中心に。」という発言に、当時共に助教授であった二人が大いに意気投合し、将来必ず信州大学も入って戴けると信じ、初めから「上信越神経病理懇談会で出発しよう。」ということになりました。

その第2回の御挨拶で「興味深い所見は、症例自体が興味深いのではなく、その見方、考え方の中にある。」と言う主旨を述べていたことは、将にこの会発足の目的であった、と今懐かしく想いおこします。

1975年の第1回懇談会から40年が過ぎ、将に4~50年前に夢見た「神経病理学」が見事に、今3大学で花開きつつあることを私は本当に嬉しく、感無量です。以上

第40回上信越神経病理懇談会を祝して

日高病院病理部 病理診断科 中里洋一

このたび上信越神経病理懇談会が記念すべき第40回を迎えられたことに、お祝い申し上げます。生田房弘先生と石田陽一先生がこの研究会を立案され、第1回懇談会が1975年11月、水上温泉のホテル水上館で開かれたことが思い出されます。群馬大学からは川合貞郎先生、川淵純一先生、横井晋先生など神経関係の教授およびその教室員が参加したと記憶しています。私もクロイツフェルト・ヤコブ症候群の2剖検例を演題として発表させていただきました。当時、CJDはsimple poliodystrophy型、亜急性海綿状脳症、視床変性を合併する系統変性型の3型に分類されていました。そこで私はこの分類に当てはめて1例をsimple poliodystrophy型、もう1例を亜急性海綿状脳症として発表したわけです。私の標本を熱心にみてくださった生田先生はじめ新潟大学の先生から、私のsimple poliodystrophy型は実は栄養障害性脳症ではないか、との貴重なご指摘をいただき、まさに「目から鱗が落ちる」思いをしました。時の権威者が提唱した分類に自分の症例をあてはめることで満足していた私に対して、標本の見方、読み方、そして権威を盲信せず自分の頭で考えて結論を出すという研究者としてのあるべき姿勢をこのときの体験は教えてくれました。この経験が病理学に対する私の精神的基盤としてその後長い間役立ったと実感しています。標本をじっくり観察し、気軽に議論しあえる本懇談会は若手神経病理医の育成に極めて有益と考えています。学問とともに参加者の交流にも本懇談会は熱心に取り組んできました。夕方からの懇親会をととても大事にしてきましたし、第11回からは親善野球大会も開催し、優勝チームにはLucy Rorke杯が授与されたこともありました。群馬大学の神経関係講座は教授が一新されました。神経内科：池田、精神科：福田、脳外科：好本、病理：横尾の各教授が本懇談会を盛り立てていきますので、どうかよろしく願いいたします。

上信越神経病理懇談会 40周年に思うこと：

信州大学医学部も何とかお仲間を継続できそうです

信州大学医学部 脳神経内科、リウマチ・膠原病内科 池田 修一

上信越神経病理懇談会が40回の節目を迎えたことを心からお慶び申し上げるとともに、毎年本研究会を主催されてこられた関係者の皆様の御努力に心から敬意を表したと思います。思い返せば私は36年前の入局1年目に、小口喜三夫先生に連れられてこの研究会へ出席するために車で長野から信濃町を通り、県境を越えて高田の街へ入り、延々と一般道を走って新潟まで辿り着いたことを記憶しております。懇談会の詳細は覚えておりませんが、私が全く聞いたこともない用語が飛び交っていたことの印象があります。その後、縁あってこの懇話会には連続して参加しましたが、群馬大学の講義棟では脳腫瘍の病理診断に電子顕微鏡を駆使した論議が活発になされており、脳腫瘍病理の奥の深さを学びました。私も中堅になり、何とか頑張ってこの懇談会に信州の症例を持って行ったのですが、風呂敷包みを開いて標本を展示した途端に毎回恥ずかしさを覚えたのが、信州から持参した標本の染色性の悪さでした。KB染色の鮮やかな青さが信州と新潟または群馬の標本では全く異なっておりました。それのみかH&Eの標本すら信州大の染色は薄ぼんやりとした迫力のない外観を呈しておりました。症例の学問的論議を前に信州大はこの会に集まる三大学の中でmuch behindの立場にあることを自覚せざるを得ませんでした。

こうした自分の若き日の負い目を何とか解消して、信州の地に神経病理の芽を根付かせたいと考え、5年前にキッセイ薬品寄附講座である、神経難病学講座を信州大学医学部に設立いたしました。またこの懇話会の古くからのメンバーである小柳清光先生に本講座へ御着任頂き、信州ブレインリソースネットワークの設立など、神経病理学研究の礎を築いて頂きました。幸いなことに、本講座は来年度リニューアルすることが最近内定しました。こうした状況から信州の地においても今後、神経病理学が活性化することが期待できそうです。そしてわれわれ信州グループも引き続き上信越神経病理懇談会を盛り上げていくことに貢献できそうです。

最後になりましたが、本懇談会が50回、60回と継続してわが国、そして世界の神経病理学の発展に寄与することを願っております。